

歴史的景観の観光化と交錯する物語

金沢市ひがし茶屋街における商業形態の多様化から

名古屋大学大学院博士後期課程 吉村真衣

1 目的

歴史的景観の観光をめぐる社会的分析では、景観の保存・保全の手段としての観光化がもたらす諸影響について論じられてきた（片桐編 2000）。とくに、歴史的景観の観光化によって行政や観光客のまなざしが介入することで、地域ごとの景観的特徴が消えるという無個性化や、地域社会や地域住民個々の有する記憶が大きな「歴史」に回収されてしまうという普遍化などの問題が指摘されている。これらの問題で注目されてきたのは、行政や観光産業、観光客など、歴史的景観の外部にある主体の権力性であり、その権力性に対する住民の反作用に関心がおかれてきたといえよう。しかし歴史的景観の観光化の事例が増加するなか、必ずしも住民による対抗的な意識や活動が表面化していない事例もみられている（神田編著 2009）。それはなぜなのか。本報告では、この問題意識を念頭におきながら、歴史的景観の観光化プロセスの多元的な理解や、それを通じた分析枠組みの再検討を試みたい。

2 方法

本報告では、金沢市ひがし茶屋街の事例をとりあげる。ひがし茶屋街は江戸時代に加賀藩の公認遊郭として創設されたのち、長らくお茶屋の集積地として機能してきたが、1975年の文化財保護法改正をきっかけに歴史的景観としての社会的評価を得た。そして1980年代後半からは、市行政による景観整備や観光客向け商店の増加がみられるようになった。従来のお茶屋とは異なる商業利用形態としての（1）伝建物一般公開、（2）観光客向け商店がいかに出現し、ひがし茶屋街の景観や利用客層、地域社会内部の社会関係にどのような影響をもたらしたのかを明らかにする。調査方法は、行政担当者、（1）（2）の関係者、地域住民などへのインタビューと、これらのインフォーマントから得た資料の分析である。

3 結果・結論

調査のけっか明らかになったのは、夜にお茶屋の常連客が立ち入るだけの閉鎖的な空間であったひがし茶屋街が、外部主体の介入をうけながら、一般市民や観光客が日中往来する歴史的景観の観光地として開放されていったプロセスである。1970年代にお茶屋減少という局面を迎えていたひがし茶屋街は、同時期に歴史的景観という評価を付与されることにより、伝建物一般公開や観光客向け商店など、従来のお茶屋とは異なる商業利用形態が出現した。伝建物一般公開では「芸どころ金沢」の礎としてひがし茶屋街を紹介し、観光客向け商店でも金沢ゆかりの商品を取り揃えている。つまりひがし茶屋街は、歴史的景観の観光地として開放されるにつれ、現地の個別の物語、とくに負の経験や記憶が捨象され、「金沢」の物語に再構成されていったのである。これは必ずしも、外部主体の権力性だけで成立した事態ではない。ひがし茶屋街の住民は、外部から持ち込まれた物語を利用しながら、自身の経験や記憶に対処していったのだった。

ただし観光地として開放しつつける限り、つねに新たなまなざしが持ち込まれる。ひがし茶屋街では、歴史的景観を楽しむだけでなく、遊郭やその習俗にまつわる痕跡を発見しようとする観光客もいる。空間をめぐる物語の不安定性という側面も、今後注目していくべきだろう。

文献 片桐新自編, 2000, 『歴史的環境の社会学』, 新曜社.

神田孝治編著, 2009, 『観光の空間 視点とアプローチ』, ナカニシヤ出版.